『「エコ・フィロソフィ」研究』第 2 号の刊行に際して

東洋大学　副学長
文学部　教授　山田　利明

サステイナビリティ学 Sustainability Science、直訳すれば、すなわち持続的発展可能学とでも称すべき新しい学術分野の構築に際して、東洋大学が主にその哲学的側面に貢献するために、東洋大学「エコ･フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（TIEPh）を組織して、東京大学等を中心としたサステイナビリティ学連携研究機構（IR3S）に参加したのは二年前のことになる。そのとき私たちが考えたことは、地球規模の持続的発展を可能とするためには、局所的なエコロジーの構築ではなく、地球規模、さらにいえば宇宙規模によるエコロジカルなサイクルの構築を目指さなければならない、ということであった。それを可能とするには、開発と発展だけを視野に入れた従来の社会システムを変える新しい理念を作る必要がある。その理念を「エコ･フィロソフィ」と名づけた。

「エコ･フィロソフィ」という用語は、それまでも何人かの人によって用いられてはいたが、いずれも環境論 Ecology を普遍化させる論理として語られることが多く、文明の発展・進化を前提とした科学哲学を視野に入れたものではなかった。私たちは、地球文明の持続的発展を支えるためには、全人類が地球の未来に責任を持つシステムと論理を形成しなければならないと考え、単なる局所的な環境論ではなく、人の生き方・暮らし方、あるいは技術のあり方・つくり方などを含む、総合学としての「エコ･フィロソフィ」を構想した。その基盤は、諸学の融合と自然との融和を目標とした東洋思想にある。幸いにもこの構想は多くの支持を得て､昨年十月には第二回目の国際シンポジウムを開催することが出来た。

TIEPh は、自然探求ユニット・価値意識調査ユニット・環境デザインユニットの三ユニットから構成され、各ユニットでは、それぞれの研究会やシンポジウムを関連諸団体とともに企画・開催してきた。本報告書は、本年度のそうした研究活動を網羅した内容となっている。換言すれば本書が「エコ･フィロソフィ」構築活動の枠組みを示すといえる。実際、TIEPh の活動は、研究活動だけではなく、関連領域との討論やシンポジウムを通して新しい「エコ･フィロソフィ」を構築するところにある。したがって本書に対する提言や意見があれば大いに歓迎するところで、活発なご提示をお願いしたい。